

THE TARGET by Nisiki Masaaki
西木正明

標

的



 集英社文庫

ひょう
標

てき
的

1995年7月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著 者 にし き まさ あき
西 木 正 明

発行者 若 菜 正

発行所 株式 集 英 社
 会社
 東京都千代田区一ツ橋2-5-10
 〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印 刷 大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© M. Nishiki 1995

Printed in Japan

ISBN4-08-748361-4 C0193

集英社文庫

標 的

西 木 正 明

目次

プロローグ 7

第一章 17

第二章 57

第三章 109

第四章 195

エピローグ 318

解説 長谷部史親

標

的

プロローグ

一九四五年四月二十七日（金曜日）

午後二時すぎ、昼下がりの陽光を浴びながら、カリフォルニア州オークランドに住む、自動車修理工ホセ・ロドリゲスは、一九三二年型のおんぼろスチュードベーカーに、女友達のエミリア・マルティネスを乗せて、サンフランシスコ湾ぞいのハイウェイを北上していた。もともとは濃紺に塗装された車だったが、十数年間の年月が、それを水色に変えてしまった。ホセ・ロドリゲスは、このスチュードベーカーを、自分の勤め先から千ドルで買った。サスペンションが折損したため、ホセが働いている工場に修理に出されたものであった。

しかし、よく調べてみると、いかれているのはサスペンションばかりではなかった。クラッチ・ディスクはとうの昔に摩耗しきっていたし、ラジエーターも寿命が来ていた。

それらをすべて修理すると、確実に千ドル以上かかる。そこでその客は、千ドル払うかわりに、車を売って七百ドル入手する方を選んだのである。

ホセは以前から自分の車を持ちたいと思っていたので、雇い主にそれを払い下げてくれる

よう頼んだ。ボスは氣前のいい笑いを浮かべて、

「いいとも。ほかならぬお前のことだ。千ドルでいいや」

と言った。その車を店で買い上げる話をまとめたのはホセ自身である。いわば自分が窓口になって仕入れた車だ。なのになぜ、元値に自らの一か月分の給料に相当する額を上乗せして買わなければならぬのかと、ホセは大いに不満だった。

しかし、目の前にある現物がかもし出す誘惑にはついに勝てず、ボスの言い値で買わされてしまった。と言っても、そんな現金があるわけではないから、頭金として十パーセントだけ払い、残りは給料からの天引き分割で払うことにした。

しかし、彼自身も雇い主にやられっぱなしだったわけではない。

修理用の部品は、すべて工場に入って来る同型車を修理したことにして、自分の車に取り付けた。つまり、買ってもいない部品の品代と、架空の修理代金をあわせて請求された客が、何人かいたことになる。

雇い主はこうしたホセの手口に気がついていた筋があるが、結局何も言わなかった。彼にしても、部品が売れ、修理代金が入るのなら、客に文句を言われなにかぎり、その方が良かったのである。

いずれにしても、そうやって手に入れた車で、ホセはガールフレンドとともに、湾岸ドライブとしやれこんだのだった。

ホセも、現在十九歳のエミリアも、メキシコ系アメリカ人である。彼らの両親は、一九二

○年代前半の、アメリカ経済が絶好調の折に、リオ・グランデを越えてメキシコから密入国して来た。

したがってホセもエミリアも、チカーノと呼ばれる二世である。エミリアはオークランド郊外のカフェテリアで、ウェイトレスとして働いている。

この日は朝から良く晴れていて、湾をへだてた対岸にそそり立つサンフランシスコの高層ビル群が、春の日ざしの中で眠たげにかすんで見えた。

ゴールデンゲート・ブリッジへの分岐をやりすごすと、往復四車線の道路から中央分離帯が消えて道幅がせばまり、ハイウェイは対向二車線となった。ホセはなお車を北に向かって走らせた。

道はいったん水辺から離れ、車窓からサンフランシスコ湾が消えた。だがそれは、ものの五分も走らないうちに、サンパブロ湾と呼び名を変えた内海となって、ふたたび車窓左手に広がりはじめた。

ハイウェイはやや上りとなり、視界の中の海面が、しだいに低く沈んで行った。

「あら、ホセ、あれを見て。軍艦よ」

エミリアが叫んで、逆光にきらめく海原の一点を指さした。

「え？ ああ、ほんとだ。軍艦だね」

ブレーキを踏んで車のスピードを落としながら、ホセがうなずいた。エミリアの言葉どおり、今しも大型の軍艦が、眼下の岸壁にゆっくりと近づいて来つつあった。

ほとんど停止しかけた車の助手席から、ホセの肩越しに、その軍艦を見つめていたエミリアが、

「それにしてもあの軍艦、すこしおかしくない？」
と言った。

「おかしい？」

ホセがさらに強くブレーキを踏んだので、スチュードベーカーは、山側の車線をふさぐ形で完全に停止してしまった。

背後でけたたましくクラクションが鳴り、それに男の怒声が混じった。

「この頓馬野郎、なんで道のど真ん中で停まるんだよ」

「うるさい、さっさと行きやがれ」

口ではそう毒づきながらも、ホセは後続の車の窓から首を突き出してわめいている男に、笑顔を向けながら、手でお先にどうぞという合図をした。

何台かの車が、スチュードベーカーの脇をすりぬけるようにして追い越して行った。ほどなく後続の車が跡切れ、前方から来る車もないことを確かめてから、ホセはハンドルを左に切って海寄りの対向車線に突っ込み、そのまま海に向かって道路を横切った。

そして、Uターンする形で今来た方向に車の鼻を向け、路肩で停車した。

「今度はわたしが海側だから、前よりいっそう良く見えるわ。ほら、あの軍艦、まるでポロ布をまといっているみたいだわ」

「どれどれ」

ホセはドアを開けて車の外に出、車の反対側にまわって、海を見下ろす崖^{がけ}の縁に立った。

「うん、こいつはひでえや。まるで巨大な鉄のスクラップだ」

「戦場から帰って来たのね」

「そうだ。太平洋のどこかで、ジャップにやられたんだ」

そう言いながらホセは、五フィート七インチのがっしりとした体軀^{たいく}を折るようにして、崖の上の草に尻^{しり}を落として座った。暗灰色で、極端に丈の長い上着のポケットから、くしゃくしゃにつぶれたラッキー・ストライクの箱をつまみ出し、中から複雑な形に曲がったタバコを一本抜いてくわえ、火をつけた。

ズボンは黒色で、膝^{ひざ}のあたりの幅が四十センチ以上もあり、すそは袋状にすぼめてあった。二、三年前から、反抗的な若者たち、とくにチカーノやイタリア系などの若者の間で流行している、ズートスーツと呼ばれる洋服である。

この格好は、戦後世界中に飛び火し、一部の若者たちの間に連綿と受け継がれている。ちなみにはるか極東の日本でも、学生服の上着丈を伸ばし、ズボンの幅を広げた、いわゆるガ克蘭・スタイルとして、一九八〇年代に至るまで、その影響が残っている。

「わたし、あんたが戦争に行ったらいやだな。早く終わらないかしら」

「まだしばらく終わらないだろうって、ウチのボスが言ってた。たぶん来年の春には、ジャップの本拠地にアメリカ兵が上陸するだろうけど、それでも奴らは、まいったとは言わない

だろうって」

「やだ。ホセ、キスして」

エミリアは大人びた口調でそう言って、足を投げ出して座っているホセの膝の上に上半身を倒し込んだ。

同じ頃、ホセとエミリアが見下ろしているメア・アイランド海軍ドックの岸壁を、海軍大佐チャールズ・バトラー・マックベイは、満身創痍まんしんそういでよろめき進む重巡洋艦『USSインディアナポリス』の艦橋に立って、ズボンのポケットに両手を突っこんだまま、じっと見つめていた。

やや灰色がかった短い毛髪が、どこからか吹き込む微風になぶられている。四十六歳という男盛りの年齢にふさわしい、バラ色の肌、大きな空色の目、広い額とつりあいを取るようにややしゃくれた顎あごなどが、マックベイ大佐に人好きのする印象と、ある種の威厳を同時に持たせていた。

岸壁を歩きまわる人影を見やりながら、マックベイは心の中で、

——よくぞ帰還出来た。先任者が、この艦には幸運の女神がとりついている、と言ったが、あれは本当だ。

と思っていた。

マックベイ大佐が、アメリカ第五艦隊所属巡洋艦USSインディアナポリスの艦長として

着任したのは、一九四四年十一月十八日のことである。前任者は、アイナール・ジョンソン大佐であった。

メア・アイランド・ドックで引き継ぎを行なったが、その時ジョンソンは、マックベイにこんなことを言った。

「こいつに乗っているかぎり、戦死することはないぜ。ジャップがパールハーバーを攻撃した時、本来ならこいつも、『オクラホマ』などと運命を共にしたはずなんだ。ところがどういうわけか、あの時パールハーバーを根城にしていた戦艦のうち、大型艦ではインディアナポリスだけが、外洋に出ていて助かった」

一九四一年十二月七日（現地時間）インディアナポリスは、パールハーバー西南方五百海里のジョンストン島付近で演習を行っていた。パールハーバーが攻撃された後、インディアナポリスはすぐさまハワイに戻り、ハワイ群島周辺の警戒にあたった。

この間一度も日本の艦船と接触することなく、およそ一週間後、パールハーバーへの帰港を命ぜられた。

次にインディアナポリスが出動したのは、南太平洋のパラオ、ニューブリテン方面で、空母『レキシントン』とともに、この方面に展開していた日本軍と戦った。この時レキシントンは、致命的打撃をこうむり、最後は米軍自身の手によって沈められたのに、インディアナポリスは、ほとんど無傷だった。

また、アリューシャン列島のアッツ、キスカを占拠している日本軍を攻撃するため、北太

平洋に出動した折、激烈な反撃を覚悟して接近したキスカ島は、すでもぬけのカラであつた。海霧に守られて日本軍が島を脱出したのに気づかず、ひとり角力ずもうをとっていたのだ。

「まあ、ざっとそんな具合で」

と、ジョンソンはマックベイに向かつて片目をつぶってみせながら、こう捨てぜりふを吐いて艦を降りて行つた。

「艦も女と同じだ。男を駄目にする性悪女と、男を守り育てる女とがいるように、艦によつて艦長の運命が変わるんだ。こいつはかなりのウバ桜だが、あくまで男を守りぬく気だてのいい大年増おとしまだよ」

たしかにインディアナポリスは、一九三二年の建造だから、就役後すでに十三年余りたつている。あらゆる点で時代遅れがめだつが、第五艦隊司令官レイモンド・A・スプルーアンズ大將が、あえてこの艦を旗艦にしているのも、その運の強さを買つてのことなのかもしれない。

その幸運は、まだ続いている、とマックベイは思う。今回だつてそうだ。ふつうの艦なら、とつくの昔に沈んでいた。

三月三十一日、オキナワ本島西方海域で作戦中、一機のカミカゼ特攻機による体当り攻撃を受けた。

そのカミカゼは、パイロットの狙いどおりインディアナポリスの主甲板に激突した。しかし、飛行機は甲板にとどまらず、はじき飛ばされたように海面に落下した。

ところが、爆弾だけは飛行機から分離して、甲板から食堂を突きぬけ、艦底の燃料タンク付近で爆発した。通常はこれで一卷の終わりである。

燃料に引火、爆発して船体に穴があき、あつという間に沈没してしまふ。だが奇蹟的に、燃料への引火はなく、ただ吃水^{きつすい}付近に爆弾の破裂による穴が二個あいただけであつた。

穴から多少の浸水があつたが、ダイバーがもぐって応急処理をほどこした結果、ポンプで排水し得る範囲に、浸水量を減らすことが出来た。そういう状態で、オキナワからここメア・アイランドまでの八千海里、およそ一万五千キロの道のりを、まるで這^はうようにして航行して来たのだった。

アメリカ海軍第五艦隊所属巡洋艦USSインディアナポリスが、メア・アイランドに到着してから三十数時間後の、日本時間四月二十九日午後。

広島県呉市^{くれし}の呉軍港に、一隻の大型潜水艦が帰投した。前年の一九四四年九月に就役したばかりの、帝国海軍潜水艦隊の中では、最新鋭の潜水艦である。

艦名は『伊五八』。いわゆる海大型と呼ばれる、艦隊用大型高速潜水艦で、全長百八・七メートル、二千四百四十トン（排水トン）の巨体に、四千七百馬力のディーゼルエンジンを装備。

水上速力は最大十七ノット、水中でも七ノット的高速で移動が可能であつた。これに搭載された魚雷は九十五型と呼ばれる高性能魚雷で、水中を実に時速四十八ノットで突進し、そ